

ウィトゲンシュタインはメタ言語を認めずに使用していたのか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3957">http://hdl.handle.net/2297/3957</a>

# ウィトゲンシュタインはメタ言語を認めずに 使用していたのか？

地域社会環境学専攻

中村 直行

## Does Wittgenstein repudiate Metalanguage in spite of using it?

NAKAMURA Naoyuki

### Abstract

Is Ludwig Wittgenstein such a philosopher as repudiates Metalanguage in spite of using it? I will answer "Never". Because he uses languages most clearly and carefully of all philosophers. I will dispel the misunderstanding that he repudiates Metalanguage, but uses it. Judging from many reliable evidences that he uses Metalanguage, I commit myself on the view that he deliberately uses Metalanguage.

Therefore my way to dispel the misunderstanding is to advance a new hypothesis that Wittgenstein doesn't repudiate the possibility of Metalanguage. Any languages can't refer to what cannot be said (das Unsagbare) for Wittgenstein, for example, Logical Form, which the language and the world share. I think that Wittgenstein must repudiate the idea that an artificial device may be made which can refer to what cannot be said. Here I define "Almighty Language" as the illusionary language which could refer to what cannot be said.

Accordingly, Wittgenstein doesn't repudiate the possibility of Metalanguage, but Almighty Language. Those who take Metalanguage as an Almighty Language, for example, the Vienna circle, misunderstand that Wittgenstein repudiates Metalanguage.

### Key Words

Almighty Language, Wittgenstein's Metalanguage, what cannot be said

### はじめに

『論考』がメタ言語を使用している、と断言できる論者は少ないだろうが、『論考』がメタ言語を認めないという解釈は一般的であるように思える。しかし、メタ言語を使用していたとする証拠は多数あり、私は『論考』がメタ言語を使用していると言いたい。末木剛博(1977)は、『論考』は超言語を認めないが、超言語を使用する、という矛盾を冒している。」<sup>1)</sup>と断言している。

では、ウィトゲンシュタインは、「メタ言語を認めないにも関わらず、実際には使用する」という言動不一致の哲学者なのだろうか。いや、決してそうではない。本稿は、『論考』がメタ言語を使用していると断言し、その上でウィトゲンシュタインが認めなかったのは、〈メタ言語ではなく、他の何かである〉という解釈を与えることにより、言動不一致説が誤解であることを主張する。

## 1 ウィトゲンシュタインはメタ言語を使用していたのか？

ウィトゲンシュタイン自身によるメタ言語の不在性の独白(1-1)に続き、ウィトゲンシュタイン言語観におけるメタ言語の(存在または機能の)不可能性を参照し(1-2)、ウィトゲンシュタインはメタ言語を否認・否定・排除しつつも、実際にはメタ言語レベルやメタメタ言語レベルから語っている実例を確認する(1-3)。本節の終わりには私は、ウィトゲンシュタインがメタ言語を使用していると断定するが、メタ言語否認については判断を保留し、2節においてメタ言語の不在性の独白はメタ言語についてのもではなかったと、「メタ言語不在宣言」(1-1)を訂正することになる。

### 1-1 メタ言語不在宣言

現在我々が「メタ言語」と呼ぶ言語が存在しないことを、ウィトゲンシュタインはその『草稿』の中で以下のように述べている。

一九一五年五月二九日

しかし、言語は唯一の言語なのか。

私がそれによって言語について話をするのが可能で、従って言語は他の何物かとの関連で私に現象することが可能となる、そうした表現手段は何故存在していないのだろうか。(…)

いかに言語はユニークなのか<sup>2)</sup>。

上記の言明から、ウィトゲンシュタインは、我々が「メタ言語」と呼ぶ言語が存在しないことを確信し、正直に独白しているに違いないと、私は考える。その理由は、そのような表現手段の不在性の根拠までも問うているからである。

### 1-2 メタ言語の不可能性

黒崎は、「ウィトゲンシュタインの言語観の側面—メタ言語の不可能性—」と題して<sup>3)</sup>、『論考』

3.12「命題とは、世界に対して投影関係にある命題記号である。」を引用する。そして、肖像画を描くことという不可能性を論じ、その類推で命題について語ることの不可能性とメタ言語の不可能性を帰結する。肖像画は、黒崎の「命題とはいわば事態の肖像画なのである」という見方から、引き合いに出されている。

この見方とは異なり、飯田隆は、「絵とその絵によって描かれるものとの間の関係を別の絵によって描くことはできないが、言語にはできる」と考えている。ただし、ウィトゲンシュタインには賛成できないとしながらも、飯田のウィトゲンシュタイン解釈も「周知のように『論考』のウィトゲンシュタインは、言語においても、絵の場合と同様にこのこと[言語とその言語によって語られるものとの間の関係を別の言語によって語ること]は不可能であると考えていた。」と黒崎と一致する<sup>4)</sup>。

つまり、黒崎と飯田は、肖像画(絵)の表現力に関しては異なるが両者ともに、ウィトゲンシュタインが、「言語とその言語によって表現されたものとの間の関係を別の言語によって表現することはできない」と考えていたと解釈している。

### 1-3 メタ言語の否認と実用例

末木剛博(1976, 1977)は、以下に示すように、ウィトゲンシュタインがメタ言語を否認・否定・排除したと述べている。

現代の論理学では像(命題)の構文論的形式は超言語(meta language)によって「語ら」れる。しかしウィトゲンシュタインは、『論考』においても、その後の思想においても、超言語を認めようとし<sup>5)</sup>ない。

本稿(T.4.12)は、「示す」と「語る」との二種の機能(T.4.022)を再論する。すなわち命題の構文論的構造(論理形式)は命題のうちに示されるが、命題の外に出して語る(叙述する)ことはできない、というのである(cf. T4.1212)。この主張によって『論考』

は超言語 (meta language) を完全に否定したことになる<sup>6)</sup>。

かくて可変記号を用いて諸命題の一般的な論理的・構文論的構造を顕現化していくことが、『論考』本来の仕事であり、「言語批判」(T.4.0031)である。一かくて超言語 (meta language) を用いずに批判ができる、と考えるのである。しかし繰り返して論ずるように、超言語を一切排除することには難点がある<sup>7)</sup>。

では、どのような難点があるのかを以下に引用してみよう。

像 (命題) が自己の論理形式を自己の内にて示すだけであって、これを客体化して語るができない、という主張は、『論考』が超言語を一切認めないことに由来する<sup>8)</sup>。

像 (命題) とその客体 (事象) とを比較するには、「超言語」(meta language) が必要であるが、『論考』はそれを許していない<sup>9)</sup>。

上記の引用によれば、メタ言語を認めないがゆえに、メタ言語を使用していないならば、像 (命題) とその客体 (事象) とを比較できないはずである。ところが、末木によれば、ウィトゲンシュタインはメタ言語を否認・否定・排除しながらも、メタ言語を使用していたとされている。末木 (1977) は、『論考』の4.041に対して、(1) ~ (5) の註を付けているが、その中から (4) と (5) を引用する。

- (4) しかも実際には『論考』は構文論も意味論も論じている。したがって『論考』は超言語を認めないが、超言語を使用する、という矛盾を冒している。
- (5) この矛盾の根本は、コロomboが指摘するように、『超言語を認めない』という主張が既に超言語に属する、という逆理である<sup>10)</sup>。

この引用からは、ウィトゲンシュタインがメタ言語を使用していたことが読み取れる。

では、ウィトゲンシュタイン自身の著作から、彼がメタ言語を使用していたという動かぬ証拠の数々を確認してみよう。命題への言及はメタ言語 (以上) の言語階層 (体系) からなされるべきものであるので、ウィトゲンシュタインによるメタ言語の使用例として、命題へ言及する例を挙げよう。

ウィトゲンシュタインは、『論考』4.5で「コレコレはカクカクシカジカであるが、命題の一般形式である。」と記述しているし、『論考』6で、命題の一般形式  $[p, \xi, N (\xi)]$  を語っている。「命題が自分自身が真である事を語る事など、不可能である。」(『論考』4.442) も、メタ言語の使用例である。

更にウィトゲンシュタインは、メタ言語だけでなく、以下のようにメタメタ言語までも使用している。

1914年9月5日付けの『手稿1914-1916』で「『関数』、『独立変項』、『命題』等の語が、論理学の中に登場してはいけないことに注意せよ！」<sup>11)</sup>と書いている。この言明はメタメタ言語からなされている。「ある言語表現を他の言語表現で解釈するという事は(…)」<sup>12)</sup>(『論考』4.025) は、「翻訳」について語っている。翻訳は、メタ言語から対象言語間で行う変換であり、メタ言語が使用できないと、翻訳は不可能である。そして、メタ言語レベルである翻訳する側の言語について語る4.025はメタメタ言語レベルにある。

このように「命題」について語っているメタ命題の数は135個以上<sup>13)</sup>にも登り、ウィトゲンシュタインがメタ言語レベルの擬似命題を多数使用していたことが分かる。

以上の議論より、私は「ウィトゲンシュタインはメタ言語を使用していたのか？」という問いに“yes”と答える。

## 2 ウィトゲンシュタインはメタ言語を認めなくなかったのか？

前節で私はウィトゲンシュタインはメタ言語を使用していたと結論づけた。もし、私がこれまでの研究のように、ウィトゲンシュタインがメタ言語なるものを認めなかったと解釈したら、ウィトゲンシュタインは言動不一致の哲学者だと私は結論づけることになってしまう。本節では、メタ言語を認めなかったのではないという別解釈を与える。

「ウィトゲンシュタインは、メタ言語の存在を認めていなかったが、実際にはメタ言語を使用していた」という主張の中の「メタ言語」の意味が二重に使われていて、そのずれのために誤解が生じたという解釈を与える。つまり、ウィトゲンシュタインはメタ言語を認めなかったというよりも、「メタ言語を使用すれば、論理形式までも語ることができる」という幻想を抱くことに反対したのではないだろうか」という万能言語拒否説を提唱する。

### 2-1 『論考』は無意味自覚の書

末木が「矛盾」と呼ぶことを、黒崎宏は、ウィトゲンシュタインが敢えて行ったとして、その意義を認めている。『論考』が無意味であることをウィトゲンシュタインが自覚していることに異論を唱える論者は稀なのではないだろうか。黒崎は“zeigen”「示す」を4通りに分類し、その「示す4」によって「無意味な命題を真に『有意義』に用いたのである」と書いている。黒崎によれば、「ウィトゲンシュタインが自覚的に書き連ねた無意味な命題の集団である『論考』全体が示すところの『示す』は、『示す4』であり、『示す4』は、『解明』であり、『照明』(“erläutern”)である。『論考』は眼から鱗を落としてくれる著作である。」<sup>10</sup>と評している。

細川亮一は「形而上学的なものを語る『論考』の命題は無意味であると認識され、投げ捨てられなければならない。ここに『論考』の極めて明晰

な自己認識がある。」<sup>15</sup>と書いているし、「ウィトゲンシュタイン自身が『形而上学の命題を書くことを断念するために英雄的な努力を必要とする』人間であった。形而上学に対する理解ある共感、しかし、形而上学の命題を語らないという英雄的な努力。」<sup>16</sup>と称えている。

このように、自覚的に言語を使用するウィトゲンシュタインが、自らが認めてもいない言語を不用意にも使用していたなどと考えるのは難しいのではないだろうか。したがって、我々が「メタ言語」と呼ぶものをウィトゲンシュタインは自覚的に使用してきたと私は言いたい。そこで、ウィトゲンシュタインが認めなかったものとは、我々が「メタ言語」と呼ぶものではなく、それ以外の何物かであったはずである。これまで末木の指摘を引用してきたが、では、ウィトゲンシュタインがメタ言語を認めなかったとする末木の根拠は何であろうか？

### 2-2 メタ言語拒否説から万能言語拒否説へ

末木の依拠は『論考』4.12に限られる。末木は以下の引用のように、『論考』4.12からウィトゲンシュタインがメタ言語を認めなかったことを帰結する。

本稿(T.4.12)は、「示す」と「語る」との二種の機能(T.4.022)を再論する。すなわち命題の構文論的構造(論理形式)は命題のうちに示されるが、命題の外に出して語る(叙述する)ことはできない、というのである(cf. T4.1212)。この主張によって『論考』は超言語(meta language)を完全に否定したことになる<sup>17</sup>。

では、『論考』.4.12とは、どのような命題であろうか。『論考』.4.12を引用する。

命題は現実の総体を表現する事ができる。しかし命題は、それが現実を表現することができるためには現実と共有しなければならな

いもの一即ち論理形式—を表現することはできない。論理形式を表現することができるためには、我々は命題と共に論理の外に一即ち世界の外に一立たねばならないのである。

ここで、末木は「メタ言語を使用すれば、論理形式を表現できる」ことを仮定して推論しているのだろう。『論考』4.128「論理的形式は数を欠く」への注として、末木は「対象言語の内部だけでは論理的形式は対象化されないので、その数を数えることもできない；しかし、超言語から対象言語を論ずる場合には、対象言語内にある論理的形式を対象化して、これを数えることもできる、からである。」<sup>18)</sup>と書いているからである。末木にとっては、メタ言語を使用しさえすれば論理形式を表現できるにも関わらず、ウィトゲンシュタインは論理形式を表現することはできないと主張している。そこからウィトゲンシュタインはメタ言語を使用しない（認めない）と推論したのであろうか。

しかし、「対象言語の内部での」論理形式といった、そんな限定付きのものは、ウィトゲンシュタインにとっては論理形式ではない。論理形式は、唯一の言語と世界とが共有しているものである。確かに、「ポチは白い。」の論理形式は、主語—述語形式であると、メタ言語から語られることができる。しかし、当のメタ言語の論理形式は自ら示すことしかできない。

「ポチは白い。」の論理形式は、主語—述語形式である。

もちろんメタメタ言語からなら、「『ポチは白い。』の論理形式は、主語—述語形式である。」の論理形式は、主語—述語形式である、と語ることができる。しかし、問題は先送りになったままである。「対象言語の内部での」論理形式なるものは、常にそれより一つ以上高い階層からしか言及されないので、先送りになった問題を解決するには、それらの階層を可算無限個用意しなければな

らない。有限な階層で言及を停止させるためには、最上階は自己完結するように自己言及することになる。しかし、「いかなる命題も、自分自身については、何事も語ることは出来ない。何故ならば、命題記号は自身に含まれる事が出来ないからである」<sup>19)</sup>。

よってこの論法は無限退行に陥るので、結局ウィトゲンシュタインの言う論理形式は語り得ないのである。ウィトゲンシュタインは『論考』の中で、言語とその言語によって表現されたものとの間に、何かが共有されることを要請し、かつその共有されるものが言語によって表現され得ないことも要請する。これら二つの要請を合わせて、言語—世界間の「形式の内蔵テーゼ」と呼ぶ<sup>20)</sup>。

ウィトゲンシュタインの関心からして、言語とは我々が使用している自然（日常）言語のことであるが、万が一、言語が世界との間に共有している論理形式を語れることが発見されたならば、その言及機能を持つ表現手段をメタ言語などとは区別して、「万能言語」と言い改めることにしよう。

しかし、世界との間に共有される形式は、ウィトゲンシュタインにとっては表現されることはありえず、万能言語は幻想であり、存在し得ない。

もしここで、「自然言語が万能言語であることが発見されることはないとしても、万能言語となる人工言語を発明することができるのではないか？」との疑問に、予め否定的に答えておきたい。

現実世界を所与として、その現実世界と形式を共有するようにつか、その形式までも語れるように要求された仕様を満たす人工言語を発明しようにも、形式の内蔵テーゼの前提の下には、その要求仕様は実現不可能であり、そんな言語は幻想となる。

メタ言語に話題を戻すと、ウィトゲンシュタインはメタ言語を導入すれば実現可能となることに対して、その導入を拒否しているのではない。メタ言語をいくら工夫しても、それが言語として満たすべき本質を持つもの（つまり言語）である限り、万能言語とは成り得ないことを形式の内蔵テーゼは要請している。言語は本質的に一つなので

ある<sup>21)</sup>。ウィトゲンシュタインは言語の本質を見通した上で、その本質を満たすものとして自然言語に関心を寄せ、観察したのである。そして、ウィトゲンシュタインは自然言語が万能言語ではないかと探求したが、そうではなかった。

つまり、ウィトゲンシュタインは現在我々が「メタ言語」と呼ぶ言語の不在性を宣言したのでもなければ、その使用を禁止したわけでもない。世界との間に言語が共有しているに違いない形式へと言語が言及できるのかをウィトゲンシュタインは問うたが、その不可能性を発見して驚いた（『手稿1914-1916』5月27-29日）。ウィトゲンシュタインは、メタ言語からでも語り得ないものとしての論理形式の存在を確信していた<sup>22)</sup>。言語というものはその本質からして、世界との間に言語が共有しているに違いない形式を言語化することはできないにも関わらず、何らかの装置を発明すればそれを表現できるという考え方<sup>23)</sup>を、ウィトゲンシュタインは拒否したのである（「万能言語拒否説」と名付ける）。

メタ言語は、ウィトゲンシュタインによって拒否された考えに染められた装置の一つに過ぎない。メタ言語に万能言語の期待を寄せる者たちの目には、万能言語を拒否するウィトゲンシュタインの言動がメタ言語拒否に写ったのであろう。

## おわりに

従来の研究において、『論考』はメタ言語を認めないがために語り得ぬものを語れぬはずでありながら、実際には語り得ぬものを語り、一種の矛盾であるという指摘を受けてきたが、本稿は『論考』に対して整合的にメタ言語を使用できる解釈を与えた。

しかし、メタ言語の使用が解禁されても、ウィトゲンシュタインによって語り得ぬものとされた、論理・倫理・美・善・悪・幸福・価値・生の意義・神などは、依然語り得ぬままである。したがって、これらを語り得ぬものとする制約は、メタ言語を認めないこと以外に拠る。ウィトゲンシュ

タインが、無意味な表現である「語り得ぬもの」によって指示しようとしたもの<sup>24)</sup>が、「語り得ず」と述定<sup>25)</sup>されてしまうような制約が『論考』のどこかにあるはずである。

では一体、〈語り得ぬものは、語り得ず〉となる制約を『論考』のどのテーゼが課しているのだろうか？『論考』の言語観では、我々は論理形式を表現できるための条件を満たしていない。つまり、我々は命題と共に論理の外に一即ち世界の外に一立つことができないのである。しかし、もし、言語の限界が世界の限界の外にあるならば、我々は命題を世界の外へと連れ出せる可能性が出てくる。連れ出しを仮定するためには、『論考』の5.6「私の言語の限界は、私の世界の限界を意味する。」の制約を解除する必要がある。したがって、私は、〈語り得ぬものは、語り得ず〉となる制約の源泉を『論考』の5.6に尋ねるのであるが、その考察は別稿に譲ることとしたい。

## 注

- 1) 末木剛博 (1977) 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考の研究Ⅱ 註釈編』(公論社) p.121。
- 2) 奥雅博訳『ウィトゲンシュタイン全集1』大修館書店1975. p.217。
- 3) 黒崎宏 (1991) 『「語り得ぬもの」に向かって：ウィトゲンシュタイン的アプローチ』勁草書房 pp.58-71。
- 4) 飯田隆 (1998) 「言語とメタ言語」付論Ⅱ「絵と言語」『現代思想』1998年1月号 vol.26-1. pp.78-89収録、[ ]内の補足は筆者による。
- 5) 末木剛博 (1976) 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考の研究Ⅰ 解釈編』公論社. p.109。
- 6) 同上書 p.238。
- 7) 同上書 p.254。
- 8) 末木剛博 (1977) 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考の研究Ⅱ 註釈編』公論社. p.43。
- 9) 同上書 p.48。
- 10) 同上書 p.121。筆者は「超言語を認めない」という主張をメタメタ(超超)言語に属すると考える。
- 11) 原文は“(…) nicht vorkommen dürfen”で、nichtを伴い禁止となっている。“Notebooks”は対訳で、英訳は“ought not to”となっている(L. Wittgenstein, *Notebooks 1914-1916*, ed. by von Wright & G.E.M. Anscombe, p. 4-4 e. (奥雅博訳『ウィトゲンシュ

- ティン全集1』大修館書店 1975. p.130)。
- 12) 黒崎宏 (2001) 『論考』『青色本』読解 産業図書. p.61。
- 13) 同上書「索引」pp.152-3より「命題」で検索される命題番号を数えた。「命題」を含む命題番号は135個を越えて更にある。原著 (Pears & McGuinness ed. 1963)では、編集方針で略したものもあり、INDEXに“proposition”を含む命題番号は42 (ハイフン表記で3個分,  $42-1+3=44$ ) 個のみ掲載。
- 14) 黒崎宏 (1980) 『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』勁草書房, pp.161-5より、一部筆者要約、傍点は筆者による。原文では「示す<sub>i</sub>」と下付きの添字になっている。
- 15) 細川亮一 (2002年) 『形而上学者ウィトゲンシュタイン—論理・独我論・倫理』筑摩書房, p.60。
- 16) 同上書 p.319-20。
- 17) 前掲書 (末木 (1976)) p.238。末木に先立ち『論考』が超言語を認めない」という指摘をしているコロンボによる指摘の依拠は『論考』4.041である。末木はコロンボを支持している (前掲書 (末木 (1977)) p.270-1)。
- 18) 前掲書 (末木1977) p.155。
- 19) 『論考』3.332 (前掲書 (黒崎 (2001)) p.54)。
- 20) ウィトゲンシュタインが単独の (一つ命題番号を付与された) 命題で、これら二つの要請をしているのではない。[言語とその言語によって表現されたものとの間に、何かが共有される] という一つ目の要請は、『論考』2.16-2.21の命題群で主張され、[その共有されるものが言語によって表現され得ない] という二つ目の要請は、『論考』4.12-4.1213の命題群で主張されている (黒崎 (2001) p.43-4, 68-9)。「内蔵」の命名は、一つ目の要請における関係が内的関係にあることと二つ目の要請における語り得ないことに由来する。ただし、共有されるものは示され得るので、隠れているのではない。
- 21) 飯田は、「私の理解する唯一の言語」(5.62)を「すべての言語は、言語である限りにおいて同等であり、したがって、唯一なのである。(本質的に異なる言語は存在しない。)」と解釈している (飯田隆 (2002.5) 『現代思想の冒険者たち07 ウィトゲンシュタイン：言語の限界』講談社 p.105)。
- 22) スラッファーは、ナポリ人があごを撫でるジェスチャー (表現) と事実 (反感・軽蔑) との間には、共通の形式が存在しないことを示唆した。ウィトゲンシュタインは、言語とその言語によって表現されたものとの間には、必ずしも、何かが共有されるとは限らないことに気づいた。しかし、部分否定はしたものの、言語と表現されたものと

の間に共通の形式が存在する場合 (パリの法廷での自動車事故の再現のケースも含めて) などは一つもないという風に全面否定したわけではあるまい。

- 23) Russellが『論考』の序文に書いてしまっている。ウィトゲンシュタインはこの序文が気に入らなかった。特に気に入らなかったのは、「言語の階層あるいは何らかの非常口というある抜け穴が多分あるのではないかということを示唆しているという事実である。」や「この第一の言語の構造を取り扱うところの、それ自体新しい構造を持った別の言語があるかもしれない。」だろう (L. Wittgenstein [1918] pp. xxi-ii (黒崎 (2001) pp. 26-7))。
- 24) ウィトゲンシュタインは、「語り得ぬもの」が無意味な表現であるがゆえに、言語としての指示機能が正常に働かないという自覚がありながらも、敢えてこの無意味な表現で語ろうとしている。
- 25) 土屋俊が定義した用語である「述定」を借用した (飯田隆・土屋俊編 (1991年) 『ウィトゲンシュタイン以後』東京大学出版会 p.152)。

## 文献

- WITTGENSTEIN, Ludwig,  
*Notebooks 1914-1916*, Basil Blackwell, 1979.  
 (『ウィトゲンシュタイン全集1』大修館書店、奥雅博訳、1975所収。)
- , *Tractatus logico-philosophicus*,  
 Routledge and Kegan Paul, 1963.
- 飯田隆・土屋俊編 (1991) 『ウィトゲンシュタイン以後』東京大学出版会。
- 飯田隆編 (1995) 『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局。
- 飯田隆 (1998) 「言語とメタ言語」『現代思想』vol.26-1・1月号、青土社、pp.78-89。
- (2002.5) 『現代思想の冒険者たち07 ウィトゲンシュタイン：言語の限界』講談社。
- (2002.9) 『言語哲学大全IV真理と意味』勁草書房、第3章「対象言語とメタ言語」pp.103-60。
- 奥雅博 (1998) 『ウィトゲンシュタインの夢：言語・ゲーム・形式』勁草書房。
- 黒崎宏 (1980) 『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』勁草書房。

- (1991) 『「語り得ぬもの」に向かって：  
ウィトゲンシュタイン的アプローチ』  
勁草書房。
- (2001) 『『論考』『青色本』読解』産業図書。
- (2002) 『ウィトゲンシュタインと「独我論」』  
勁草書房、第三章「ウィトゲンシュタインの  
哲学観」 pp.101-30.
- 末木剛博 (1976) 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論  
考の研究Ⅰ 解釈編』公論社。
- (1977) 『ウィトゲンシュタイン論理哲学論  
考の研究Ⅱ 註釈編』公論社。
- 滝浦静雄 (1983) 『20世紀思想家文庫 6  
ウィトゲンシュタイン』岩波書店。
- 永井均 (1996) 『ウィトゲンシュタイン入門』  
筑摩書房。
- 野矢茂樹 (2002) 『ウィトゲンシュタイン『論理哲学  
論考』を読む』哲学書房。
- 細川亮一 (2002) 『形而上学者ウィトゲンシュタイン  
—論理・独我論・倫理』筑摩書房。